

森・里・川・海郷土学習モデルプログラム集

(最上川流域 試行編)



2010年3月

NPO法人

里の自然文化共育研究所

目次

1、はじめに 1

2、プログラムエリアの概要

3、タイプ別モデルプログラム 2

(1) 森のプログラム 2

(2) 里のプログラム 2

(3) 川のプログラム 2

(4) 海のプログラム 2

4、モデルプログラムの事例記録ー最上川・立谷沢川観察会ー

5、おわりに 1

1、はじめに

最上川流域の農山漁村は森里川海のふるさとの恵みに満ち溢れています。

こうした豊かな自然とそれに根差した生活の知恵や技術を学ぶことは、これからの 21 世紀を暮らしていくための「生きる力」になります。

本プログラムでは、それぞれの地域集落を基本単位に設定しながら、そこに暮らす人々との交流を深め、地域に根差した自然と文化について学び、さらには保全と地域づくりにもかかわっていかうということを視野に入れていきます。また、各地域に密着しながらも、地域外の森里川海のつながりにも配慮した複合的なプログラム設定を心がけました。

そして郷土学習プログラムは、子どもたちだけでなくそれに係る大人にとっても大切です。社会教育・成人教育の観点から学びが仕事や生業と密接なつながりを持ちうることも勘案しています。

多様な人々や主体の参加によって、森里川海の恵みが継承されると同時に豊かに活用され、新たな農山漁村作りにつながることを目指します。そのために学びを実践に生かしていくプログラムの設定モデルと地域での運用のポイントを紹介します。



イラスト：NPO法人里の自然文化共育研究所が目指す森里川海の学びと実践のイメージ

2、プログラム実施エリアの概要

(1) エリア紹介

最上川流域の農山漁村は、森里川海が密接な結びつきの中で成り立っています。それは例えば溪流に生息するヤマメが海に下ってサクラマスになって春先戻ってくるといったことに代表されるような生態系的なつながりから、田植えのころに下流の庄内の人々が上流の最上地方に手伝いに来るといった社会的なつながりまで様々なレベルで存在します。

ここでは、本プログラムの中心的な担い手となっている各地域の代表的エリアを簡単に紹介します。



図：最上川中華流域の活動団体位置図

(2) 森・里－田茂沢の里－

かつての分校舎を利用して森と里の様々な暮らしの知恵や技術を伝えています。炭焼き、水辺の観察、無農薬のコメ作り、冬の年中行事の数々。農家へのホームステイを通じて子どもたちとの交流を深めます。



(3) 川—清川の里—

最上川河畔に位置する清川では、水辺と森を組み合わせた体験学習ができます。かつての最上川舟運の拠点だったこの地域では、舟運にまつわる様々な史跡も今に伝えられています。また、川を上下する生き物たちとの出会いも楽しみです。



(4) 海—飛島—

最上川河口から沖合 40 キロほどに位置する飛島は全島が漁場という豊かな海資源に恵まれています。一方で漂着ごみという課題も抱えています。島の恵みとそれを守るための取り組みから、今の私たちの暮らしのありようを考えていきましょう。

飛島の海辺の学びと保全マップ



3、タイプ別モデルプログラム例

(1) 森のプログラム例

森の植物や生き物の観察の他、間伐や枝打ちなどの保全活動、散策道づくりなどの整備活動、炭焼きや薪割りなどの生業のお手伝いなど、体験だけでなく森を保全し伝えていく取り組み実践まで幅広く取り組むことができます。

A. 森の恵み体験プログラム（4月～6月）

9：00 集合・オリエンテーション

安全指導

9：30 山菜採り（コゴミ・タラノメ・コシアブラ・ワラビ・ゼンマイ取りなど）

12：00 お昼（森の中でおいしいお弁当）

コゴミなどは取り立てを湯がいておひたしにし、その場でいただく

ヤマウドなどは刺身で食べてもおいしい

13：00 採ってきた山菜の塩漬け保存作業

14：30 山菜料理を試食しながら山のお話を聞く

15：00 終了



B. 森の保全・整備体験（通年）

9：00 集合・オリエンテーション

安全指導（のこぎり・ナタなどの使い方講習）

9：30 枝打ち作業

10：30 間伐作業の見学

11：00 薪集め

12:00 焚き火体験
焚き火を使った山料理

12:30 昼食

13:30 林業家から山のお話

14:30 森の散策と生き物植物観察
下山

15:30 終了



C. 里山散策と森の生業体験 (4月～6月、10月～11月)

9:00 集合・オリエンテーション

9:30 里山散策
雑木林の間引き作業手伝い

11:00 薪割り体験

12:00 炭焼き窯でピザ焼き

13:00 キノコの菌打ちお手伝い

14:00 キノコ採りもしくは焚き火体験



(2) 里のプログラム例

A. 田んぼ・畑、地域の生業お手伝いプログラム (5月～11月)

- 9:00 集合・オリエンテーション
- 9:30 畑作り作業 (田植え作業)
- 11:30 小川で泥おとし (水遊び)
- 12:30 野外で新鮮な野菜を丸かじり
- 13:30 お昼寝
- 14:30 野菜の収穫作業・田んぼでの生き物観察など
- 15:30 終了



B. 里の環境保全活動ー休耕田を利用したビオトープ作りー

- 9:00 集合・オリエンテーション
- 9:30 ビオトープでの生き物観察
- 10:30 散策道整備と草取り作業
- 11:30 畑の収穫体験
- 12:30 採れたて野菜の丸かじり昼食

13:30 木道・看板などの設置作業
水辺環境整備作業

15:00 終了



C. ものづくり・郷土料理教室・年中行事体験

9:00 集合・オリエンテーション

9:30 郷土料理教室

12:00 試食会

13:30 ものづくり塾（わら細工作りなど）

15:30 品評会

16:00 終了



(3) 川のプログラム例

A. 川漁体験

- 9:00 集合・オリエンテーション
- 9:30 仕掛け網の引き揚げ
- 11:00 捕獲した魚の加工作業
- 12:00 焼き魚で昼食
- 13:30 漁師さんの話
- 15:00 終了



B. カヌーによる川体験

- 9:00 集合・オリエンテーション
安全指導
- 10:00 出航
- 12:00 対岸でお弁当
- 13:00 出航
途中で滝遊び
- 15:00 到着
後片付け
- 16:00 終了



C. 水辺の生き物観察と水遊び

- 9:00 集合・オリエンテーション
- 9:30 生き物観察
釣り体験など
- 12:00 川魚で昼食
- 13:00 休憩
- 14:00 水遊び
- 15:30 終了



(4) 海のプログラム例

A. 海辺の生業手伝いと生き物観察

9:00 集合・オリエンテーション

9:30 トビウオ野焼き乾し作り手伝い

12:00 焼き魚で昼食

13:30 海辺の生き物観察と水遊び

16:00 終了

(番外編：20:00～夜光虫の観察会・星空観察会など)



B. 海辺の保全活動と生き物観察

9:00 集合・オリエンテーション

海岸クリーンアップの意義と安全指導

10:00 クリーンアップ作業

12:00 昼食

13:30 海辺の生き物観察・周辺散策

16:00 終了

(番外編: 20:00~夜光虫の観察会・星空観察会など)



4、モデルプログラムの事例記録－最上川・立谷沢川観察会－

ここで見れること

～清川の里の自然と暮らしから学ぶ～

最上川と立谷沢川の合流点である庄内町清川は、古くから舟運の港町として栄えてきました。

また日本の名水100選にも選ばれた月山を源流とする立谷沢川、そして日本海と直結して流れ、サクラマスやサケなどの遡上、アユの産卵場所としても有名な最上川の豊かな自然環境に恵まれています。

こうした豊かな自然環境を利用した漁業や周辺の里山の恵みによる暮らしの様々な知恵や技術が息づいています。

最上川・立谷沢川観察会では、自然はもとよりそれに根差した地域の生活文化にも触れながら川と人が織りなす地域社会を学んでいきます。



秋、カニ漁見学の様子



散策ルート

※1周約1時間～1時間半のコースです。

●水辺の楽校

水辺の生き物が生息できるよう作られたビオトープです。



●立谷沢川河畔の植物・生き物観察

カジカ、ウグイ、カニなどを玉網で捕獲し観察します。
また、川虫などを捕まえて水質の状況を確認しましょう。



●舟だまりと笹舟見学

最上川の漁に欠かせない舟。舟運、木造舟と漁文化について学びます。



●最上川河川敷の植物と川観察

最上川河川敷の多様な植物について見学すると同時に、雄大な最上川の流れを観察します。



●御殿林散策・植物観察

藩政時代から続く御殿林の森。地元で親しまれているこの森は豊かな植物に恵まれています。トレッキングと森づくりの体験を（22年6月林野庁「遊々の森」協定締結）を行うことができます。



周辺で見れるもの

- ・ 御殿林

だし風から清川の町を守るための防風林。
かつて庄内藩主の御殿が置かれていました。

- ・ 北館大堰

立谷沢川の水を取水し庄内平野に流すための
用水路。江戸時代初めに作られました。

- ・ 笹舟（石舟）

今も使われている最上川の木造舟。かつて石を
運ぶことにも使われたことからこの名称がついています。

- ・ さみだれ大堰・フィッシュギャラリー

珍しいゴム堰。ゴム風船を膨らませることで
水をためたり流したりしています。また、川底
から川を上下する魚を見ることができます。



団体紹介

◇NPO法人里の自然文化共有研究所について

地域の子ども達への環境教育活動を行っていた市民団体「南部里地探検隊」を前身にする。2003年8月、組織体制を整え「角川里の自然環境学校」として設立された。農山村の自然や文化を次世代へ伝えるとともに、本当に豊かに生きるための智恵や技術を教えつつ、子ども達と一緒に新しい「ふるさと」づくりを進めている。山、川、食、農、ものづくり、民話など多彩なプログラムを実施しており、里の住民による地域運営学校として、教育委員会などのサポートを受けながら行政と一体となつて、継続的な自然体験学習活動を展開している。「実際に生活し子ども達と共に活動する里地里山博物館」（守山弘東京農業大学客員教授）など内外から高い評価を受けている。

2004年「里地里山活動30」（読売新聞主催・環境省共催）選定、2005年「田園自然再生コンクール」（農林水産省・環境省主催）入賞、同年「エコキッズやまがた大賞」（山形県環境アセスメント協会）受賞。2006年6月山形県環境学習支援団体認定。2007年2月食育活動東北農政局長賞受賞、4月「みどりの日」環境活動功労者環境大臣表彰。また「森、里、川、海とつなぐ自然再生」（中央法規出版2005年）に全国の自然再生13事例の1つとして取り上げられている。

07年4月研究教育調査部門が独立。10月には「エコ杯やまがた」入賞。更なる活動の幅広い展開をしている。

住所 山形県東田川郡庄内町清川字花崎72番地

TEL 0234 - 28 - 9333 Fax 0234-28-9339

Mail icesrc@nifty.com

5、おわりに

農山漁村の森里川海の恵みは、人々の暮らしの中で育てられ活用されています。そしてそのための知恵や技術がとても大切であり、それをいま新たに継承していくことが求められているということ、それが本冊子で伝えようとしていたことでした。

学びを単なる知識にとどめるのではなく、生かし実践していくことで、地域の保全やコミュニティづくりに活用していくことが大切です。それは一方的に伝えるものでもないし受け取るものではない試行錯誤の結果生まれる双方向の学びを含んだものです。

本冊子では、これから農山漁村について学びを深め、長い付き合いでかかわり続けてくれる人の役立つことを願って作られました。多様な農山漁村の地域の人々の営みは、そこに飛び込んで見て初めてわかるということも多いということもあります。そして同じ農山漁村でも地域が違えば、がらっと異なります。こうした多様性こそ森里川海がもたらす豊かな恵みであるともいえるでしょう。そしてその多様な恵みには、様々な課題を抱える現代社会において、これから生きていくための大切なメッセージが込められています。

NPO 法人里の自然文化共育研究所は、前身となる角川里の自然環境学校（山形県 2003 年 8 月設立）から一貫してそれぞれの地域に密着し、地域から学び、創り出すという姿勢で取り組みを展開してきました。その姿勢は活動の規模や範囲が広がりかわる主体が多様化しても変わることはありません。

活動の成否は、単なる地域住民の熱意や思いだけによりません。外から直接・間接的にかかわる様々な当事者との連携協働が構築できるか、相互のニーズをより広い視野に立って認め合い、議論だけではなく労力を出し合って実践活動に向かえるかどうかが重要だと考えます。外に開き多様な主体とともに学び合い関係を構築することは新たな可能性への道を開きます。しかし一方でそこには希望や喜びだけではなく、暗い様々な種類の困難や、時には悪意に満ちた危険にさらされることさえあるのです。

私たちは 2010 年、残した根の自立的成長を願いつつ山形県での主要業務に一区切りをつけ長野県に移転することを決定しました。これまでの取り組みを振り返るとともに、より広い視野に立って行動できるプラットフォームの構築に向けて実践的なノウハウの蓄積を行っています。次世代につなぐ農山漁村の里づくりを目指して私たちの挑戦の旅は続いています。

本冊子が素敵な日本のふるさとの原風景を次世代に伝え、新たに作り出していくことの一助になればと願っています。

2011 年 3 月 雪解けの信州より
NPO 法人里の自然文化共育研究所
専務理事 出川真也

011年3月発行

NPO法人里の自然文化共育研究所

住所：長野県中野市大字深沢44番地（現在移転予定・定款変更申請中）

電話・ファックス：0269-26-5819

メール：icesrc@nifty.com

ウェブ：<http://homepage2.nifty.com/dega-web/>